

〔三宅管内の遺伝資源の収集・評価・保存〕  
施設栽培におけるレモン類の品種特性把握と生育評価  
～レモン類の品種および樹形が初期生育に及ぼす影響（2年生）～  
池田行謙・浅海拓真  
（島しょセ三宅）

【要約】施設レモン2年生樹の生育について、樹幹容積は、開心自然形、垣根仕立てとも「リスボン」が優れる。一方、樹高および主幹径は、開心自然形では品種間差は認められないが、垣根仕立てでは「リスボン>ユーレカ>ビラフランカ」の順に優れる。

【目的】

三宅村において、レモン類の安定的な生産と将来的な産地化を図っていくために、施設栽培での適正品種や仕立て方法など適応性評価を行う。本試験は、その初年度として、2年生樹の初期生育を比較し、評価する。

【方法】

レモン「リスボン、アレン・ユーレカ（以下、ユーレカ）、ビラフランカ」の3品種を供試し、耐風強化型パイプハウスに1年生苗木を2022年11月25日に植栽した。試験区は、樹形に応じて開心自然形区（以下、開心区）および垣根仕立て区（以下、垣根区）の2区とし、開心区（樹間2m×列間2.5m）ではリスボン6樹、ユーレカ11樹、ビラフランカ5樹を、垣根区（樹間1m×列間2.5m）では各品種14樹を各々定植した。樹冠容積および樹高は2023年11月16日、主幹径は2023年12月6日に測定した。

【成果の概要】

1. 樹冠容積：開心区では、「リスボン」(2.5 m<sup>3</sup>)が「ユーレカ」(1.7 m<sup>3</sup>)、「ビラフランカ」(1.6 m<sup>3</sup>)と比べて、約1.8倍多かった。垣根区では、「リスボン>ユーレカ>ビラフランカ」の順に多く、特に、「リスボン」(1.9 m<sup>3</sup>)は「ビラフランカ」(1.0 m<sup>3</sup>)と比べて約2倍多かった。なお、いずれの品種も、開心区が垣根区より多い傾向で、これは、開心区の植栽密度が垣根区の半分で、受光条件が優れたためと考えられた（図1）。
2. 樹高：開心区では、品種間の差は認められなかった。垣根区では、「リスボン」(2.1 m)および「ユーレカ」(1.9m)が「ビラフランカ」(1.6m)と比べて20～30%高かった。なお、いずれの品種においても、垣根区が開心区より高い傾向であった。これは、主幹を優先的に伸長させる垣根仕立ての樹形の特徴が原因と考えられた（図2）。
3. 主幹径：開心区では、品種間の差は認められなかった。一方、垣根区では、「リスボン>ユーレカ>ビラフランカ」の順に太く、「リスボン」は「ビラフランカ」と比べて約25%太かった。なお、いずれの品種も、開心区が垣根区より太い傾向であった（図3）。
4. 以上から、レモン類2年生の生育は、樹幹容積では開心区、垣根区ともに「リスボン」が大きかった。樹高および主幹径は、開心区では品種間差は認められないが、垣根区では「リスボン>ユーレカ>ビラフランカ」の順に大きかった。品種間の比較では、いずれの調査でも「リスボン」が最も優れたが、作業性も含めてさらに調査を継続する。

【残された課題・成果の活用・留意点】

収量については、初結実する次年度以降に調査開始する。

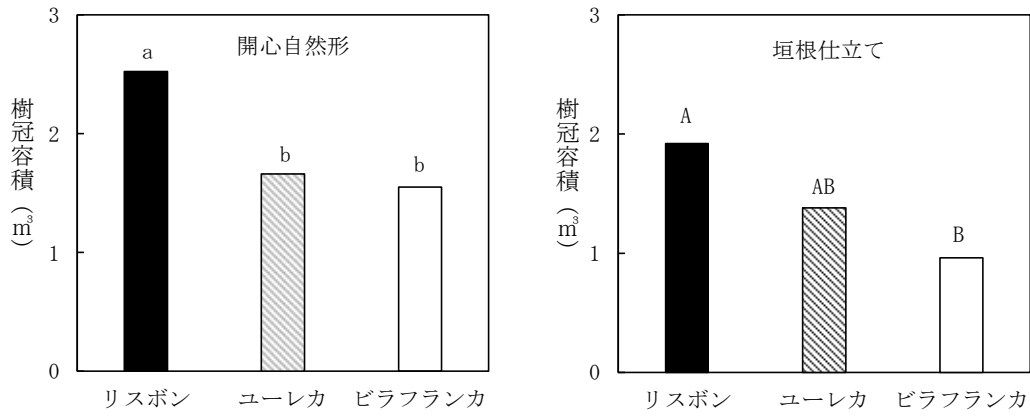


図1 施設栽培におけるレモン類の品種および樹形が樹冠容積に及ぼす影響 (2年生)  
Scheffeの多重比較法により異符号間に有意差あり (p<0.05)

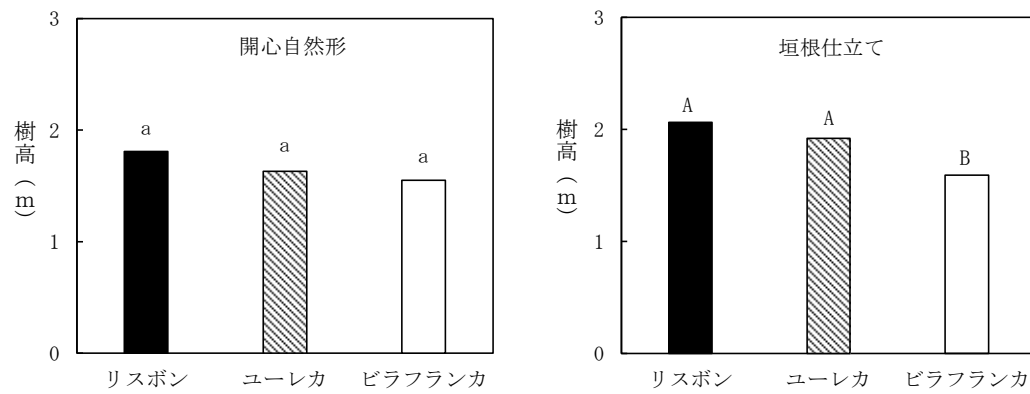


図2 施設栽培におけるレモン類の品種および樹形が樹高に及ぼす影響 (2年生)  
Scheffeの多重比較法により異符号間に有意差あり (p<0.05)

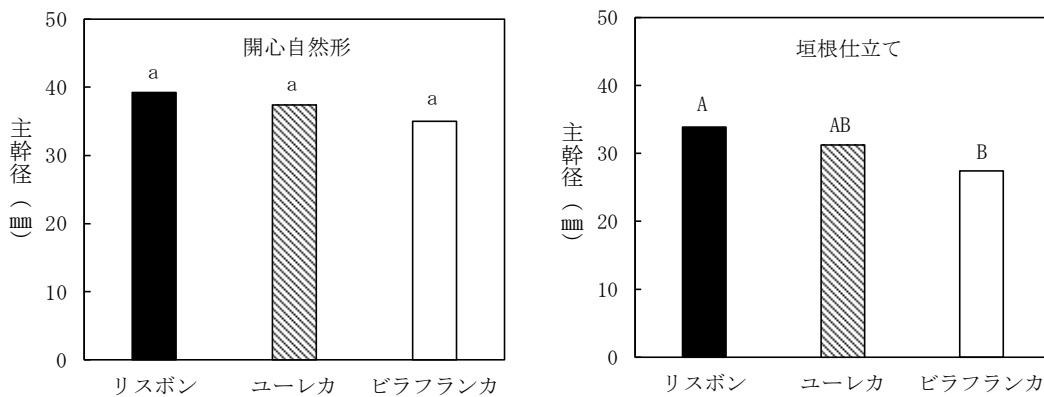


図3 施設栽培におけるレモン類の品種および樹形が主幹径に及ぼす影響 (2年生)  
Scheffeの多重比較法により異符号間に有意差あり (p<0.05)